

月刊 ウィーン

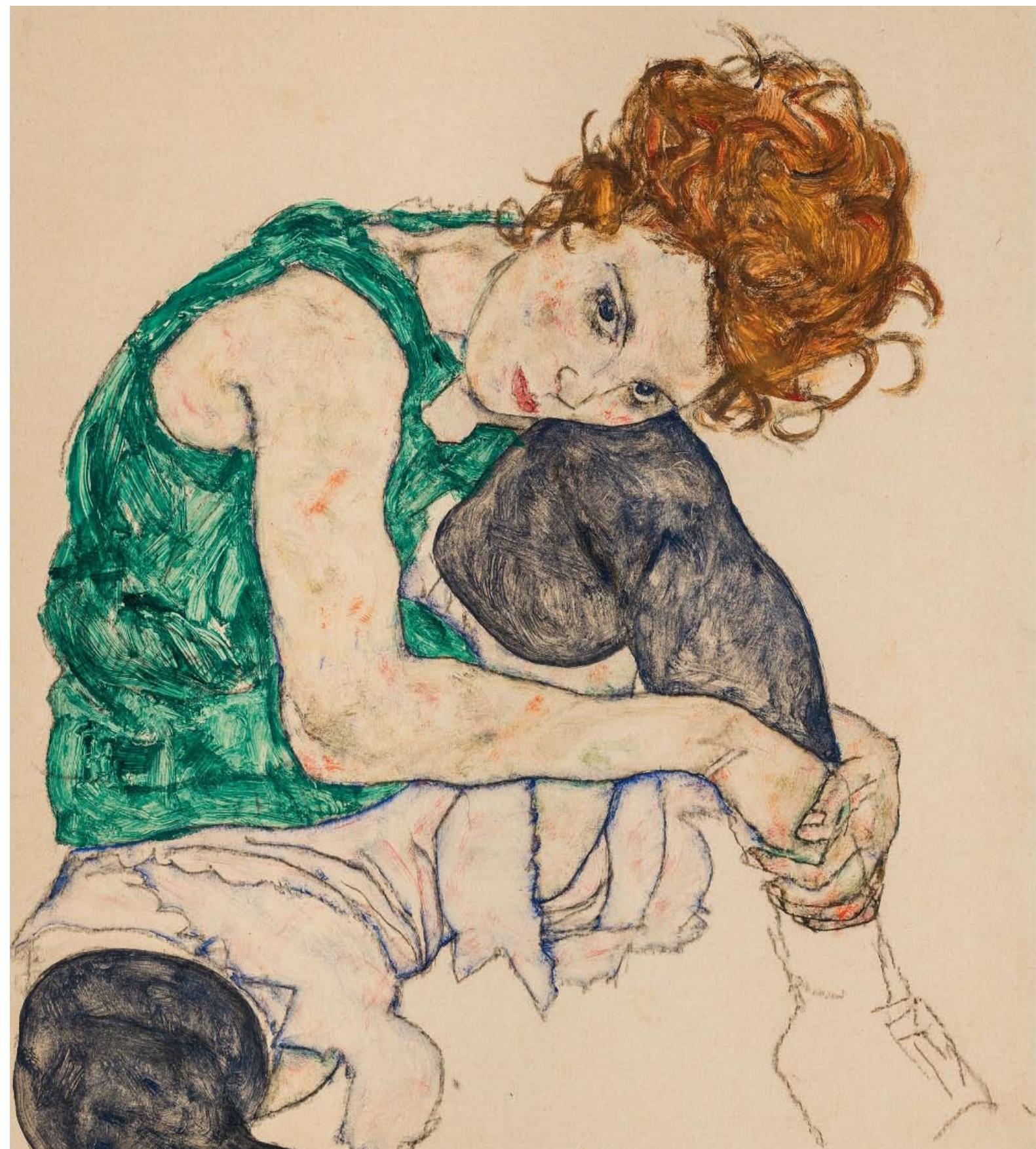
GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊 37 年目 Nr. 422

2025年5月号



Egon Schiele, Sitzende Frau mit hochgezogenem Knie, 1917 © National Gallery Prague, Foto: National Gallery Prague 2025

杉本純の原子力の話II ウィーンと京都

やや古い話であるが、本年二月一八日、政府は「第七次エネルギー基本計画」を閣議決定した。この計画は、我が国の中長期的なエネルギー政策の方向性を示すものであり、エネルギー政策基本法に基づき策定している。今回は、前回の第六次計画（二〇二二年一〇策定）から約三年ぶりの改定となる。

(参考) エネルギー需給の見通し (イメージ)



(注) このグラフは最終エネルギー需給の見通しであり、発電施設と電力網を合わせたものの電力需給。
https://www.enecho.meti.go.jp/category/others/basic_plan/

第七次計画の策定背景には、以下のような国内外の情勢変化がある。(一) ロシアによるウクライナ侵攻や中東情勢の緊迫化により、エネルギー供給の安定性の重要性が再認識された。(二) AIやデータセンターの普及に伴い、二〇四〇年度には電力需要が二三年度比で約二〇%増加し、一・一〜一・二兆kWhに達すると見込まれている。(三) 二〇五〇年カーボンニュートラル実現に向け、二〇四〇年度までに温室効果ガス排出量を二〇一三年度比で七三%削減する目標が設定された。

本計画は、安全性 (Safety) を最優先としつつ、エネルギーの安定供給 (Energy Security)、経済効率性 (Economic Efficiency)、環境適合性 (Environmental) の三要素を同時に追求する「S3E」の原則に基づいている。二〇四〇年度の電源構成については以下の目標が示され

ている。再生可能エネルギーは全体の四〜五割程度(内訳は、太陽光…二二〜二九%、風力…四〜八%、水力…八〜一〇%、地熱…一〜二%、バイオマス…五〜六%、原子力は二割程度、火力は三〜四割程度。これにより、再生可能エネルギーが初めて最大の電源と位置づけられた。

原子力については、これまでの計画で記載されていた「原発依存度の可能な限りの低減」という文言が削除され、原子力発電を再生可能エネルギーと並ぶ「脱炭素電源」として最大限活用する方針が明確にされた。具体的には、安全性の確保を前提に、既存原発の再稼働や次世代革新炉の開発・設置を推進することが示されている。また、原子力を持続的に活用していくため事業環境の整備やサプライチェーン・人材の維持強化についても重要性が示されている。

計画では、国民各層とのコミュニケーションの深化、充実が重要視されている。特に、原子力発電所の立地地域との共生や、再生可能エネルギー導入に伴う地域社会との連携が課題とされている。また、脱炭素化に伴うコスト上昇を抑制し、経済成長と環境保護の両立を目指すことが求められている。

公表された第七次計画に対し、原子力発電を最大限活用する方針が明確にされたことを評価する声がある一方、再生可能エネルギーが全体の四〜五割程度もあるのは、現状でも太陽光発電規模は上限に近くこれ以上の環境破壊は許されない、太陽光は夜や雨天では発電できず、風力も無風の時は発電出来ないなど不安定なため、大量の火力のバックアップが欠かせず結局は高コストになる、太陽光や風力発電は寿命後の廃棄物処理処分技術が未確立などの大きな問題も指摘されている。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両地に生きたる動物(その十)を紹介したい。ウィーン市内を歩くと、芝生の上を跳ね回る小さな赤茶色の影に出会うことがある。ヨーロッパアカリスと呼ばれ、ふさふさの尾と愛らしい姿を持つこのリスは、シェーンブルン宮殿庭園やプラター公園、フォルクスガールテンなど、街中の緑地に住み着いている。冬に備えて木の実を地中に隠す「貯食行動」は、寒さを前にした小さな勤労者のようで、見る者の心を和ませる。

観光客の差し出すナッツに近づいてくる個体も多く、ウィーンの都市と自然がほどよく調和していることを象徴する存在である。このリスは、文化的にも親しまれており、勤勉さや敏捷さ、蓄えの美德を象徴し、古くから絵画や電話「一八〜一九世紀の児童書の中に頻りに登場する。とりわけウィーン近郊の森「ウィーナーウアルト」には、リスを含む森の動物たちを題材とした作品が数多く生まれた。街の紋章や民芸品にも姿を見せ、リスはウィーン市民の自然観の中に根付いている。

一方、京都でリスに出会うには、少し山の奥へと足を運ぶ必要がある。京都市内ではその姿を日常的に見ることは難しいが、近郊の鞍馬山や比叡山、京都大学芦生研究林など、静かな山林には二ホンリスが暮らしている。日本固有種であるこのリスは、本州・四国・九州の山林に生息し、木の実や果実を主食とし、枝から枝へと木の上を跳び移る運動能力に優れている。森にひっそりと生きるその様子は、京都の自然観に通じる奥ゆかしさを感じさせる。京都市動物園や嵐山モンキーパークで飼育展示されているリスも存在し、市民にとっては「森の動物」というイメージが強くある。文化的には、文学や絵画に登場することは少ないものの、日本の自然観や四季を象徴する動物として扱われている。江戸時代の蒔絵や根付に秋の実を抱えるリスが描かれ、「慎ましき」や「蓄えの美德」の象徴として受け取られてきた。また、自然観察の教材や絵本にもたびたび登場し、京都の子どもたちが自然に親しむ入口のひとつともなっている。

余談であるが、筆者がウィーン在住時は、プラター公園内でよくリスを目撃した。確かに街の生活に溶け込む存在であった。京都では比叡山登山の途中でリスを見かけたので、深い自然の一部と言えよう。今月も両地に生きたる動物を紹介することができた幸運に感謝しつつ、プラター公園内のリスの写真を掲載させていただきます。



© AYANONOTE 彩乃の音

■ 杉本純 東京科学大学特任教授
 元京都大学教授
 元原子力機構ウィーン事務所長 ■



© Bardstale / stadtwildtiere.at



© GEKKAN-WIEN



© GEKKAN-WIEN